

特110

743

主身主義者大塚正男著

素人の病源觀

東京

至正堂發行



始



きはしがき

はしがき

昔二休和尚の色則是空に答へた歌に『白露の己の姿を其儘に紅葉に置けば紅の玉』と言ふのがある。元來色も空間に存する中は目に見ゆるものでない。物に吸収せられて始めて赤とか青とかに見ゆるもので。形がなければ色もない。人も尚且つ其通りで行ない現してこそ。人に心のあるものだと言ふことも出来るが。若し人に心がないがなければ心ずしも人に心のあるものだと言ふことを認むる。果ては空である。而して世の人の言ふが如く人の行ないの變はるのは。果して心あるが爲めであらうか。一休和尚の空則是色に答へた歌に『花を見よ色香も共に散り果て、心あくても春は來にけり』と言ふのがある。則ち人の行ないの變はるのは一に心あつて然るものでない

4. 1 5  
内交

人の見て以て心なしとする草木でさへ年々歳々時節に促がされて  
 變はつて居る。人の行ないの變はるのも。要するに肉体の變化にも  
 伴ふものであると言へる道理を説いたもので。所詮は人に心の有無  
 を確實に定める必要がない。唯單に人は行なひさへ正しければ夫れ  
 でよいとのことではあるまいか。然かも其行なひなるものは肉体と  
 直接するもので。無形な心とは左程深かい關係のあるものでない。  
 ツマリ有つてもよし無くてもよいものである。否な寧ろ無いとせな  
 ければ行爲の適確を期することが出来ない。  
 然るに世人は其心則ち肉体の耳目に映ずる幼影を追ふに急なるを  
 以て。自己の肉体の眞價と行爲とは。非常に懸隔を生じて其距離甚  
 だ遠く。罪惡は日に益々甚だしくなつて來て居る。之れ余輩が微力  
 を顧みず敢て此著をなし。世に警告を與へんとする所以である。

大正二年三月於寓居

著者識

目次

病氣とは何ぞや  
 人は無生物の生物に化成したものである  
 子種は所謂無生物である  
 病根をなす微菌とは果して何物か  
 吐瀉の起るは何故か  
 痛疹を感じる理由如何  
 病氣に對する素人療法  
 他國人の眞似をしてはならぬ  
 酒は熱なるが故に肉体の内外から血に吸収せらる  
 河原乞食の眞似は素顔の美を損す  
 齒に對しては鹽に優さつた齒磨はない

素人の病源觀

主身主義者 大塚正男 述

○病氣とは何ぞや

病氣とは何ぞやとの問題に對しては。只一語体温の變調であると言へば其根底に於ける要を盡くして居る。然らば其体温なるものは果して何によつて變調を來たすものであるか。夫れは言ふまでもなく氣熱の不調和である。果して然りとすれば如何なる理由によつて氣熱の不調和は体温に變調を來たすのであるか。其理由を闡明するには先づ以て氣熱と人の肉体との關係を説明せなければならぬ。抑も天地自然を成す元素は何であるかと言へば余輩は氣熱の二なりと斷ずるに憚らぬ。併しながら氣熱の二なりと斷じ得らるゝのは。

人間肉体の感覺を基礎としての推斷であつて、天地自然を基礎としての斷案でないことは斷はつて置く。天地の自然狀から言へば氣中に熱あり熱中に氣ある所謂氣熱混和の不可分体であつて。要するに天地自然は混狀の一元をなすものである。而して天地自然に於ける無形のものも有形の物質も總て氣熱の混成化物なるが故に。相生相尅の變化が營まるゝのである。例を空氣に取れば實に下の通りである。彼の天地自然に存在する空氣は五分の四は窒素で五分の一は酸素で。然かも此の酸素は頗る強烈なもので之れを和らぐるものは窒素であると學者は言つて居る。併しながら之れは學者の説で。此中の窒素は余輩の言ふ氣に當り酸素は熱に當るか否かは元より問ふ處でない。余輩の見て以て氣なりとするは天地自然に盡くることのないもので。其本然の性は飽くまで寒むいも

の冷めたいもの收縮すべきものであつて。其自然狀は無色透明にして形をなさないものと無色透明にして形をなす水の二種とし。又熱は是亦天地自然に盡くることのないもので。飽くまで熱ついても膨脹するものであつて其自然狀は青、黄、赤、緑、紫、等の無形の色と凝結して形をなす土石等とするのである。而して其分量は縦し如何あらうとも空氣は氣熱の混和物なることは絶對性を帯びざる學説としても一般に之れを肯定せねばならず。又實際に於ても之れを否定することが出来ない。實際に於ては彼の電氣を見れば能く分かる。則ち電氣は空氣中の熱が摩擦によつて其勢力を擴ろめ遂ひに氣を制服して全然空氣を熱化し遂ひに火となつたものである。一體熱は其性甚だ強烈なものである。然かも其摩擦は其勢力を消

長するもので。チヨツと摩擦しても直ちに氣を熱化せんと企つるものである。電氣は言はゞ五分の一の熱と五分の四の氣の混和せる空気が。摩擦によつて熱が漸次其勢力を擴ろめ。五分の一が二となり三となり四となり。氣の五分の四が三となり二となり一となりて遂ひに全く熱化せられ。斯くして火となつたものである。人の肉體も其混成状態は殆んど空氣と等しく三分の二の氣と三分の一の熱とより成つたもので學術上の用語を藉りて言ふときは三分の二の水分と三分の一の固形分より成つて居るものである。委しく言へば十五貫目の人は十貫目が氣で五貫目が熱である。故に人の肉體は三分の二の氣と三分の一の熱とが能く調和して始めて活動が出来るのである。而して此調和の權衡を秤量するものは何であるかと言へば。則ち仮定体温三十五度である。若し此体温に變調を來たして

三十六度七度を算するに至るときは人間の活動が出来なくなつて仕舞ふ。要するに其活動の出来なくなつた体力の衰弱を稱して病氣と言ふのであつて所詮は氣熱の調和を欠いたのである。併しながら人の肉體には三十五度の体温が固有であつて之れ以下に下だることがないのである。何故かと言へば元人間は三十五度の熱によつて肉體をニシラへ上げられたので三十五度は則ち人間の生命である。故に三十五度以下の氣にも三十五度以上の熱にも直ちに破壊を企てらるゝものである。然らば其三十五度の体温の固有なる理由如何。以下之れを詳かにすることゝせん。

○人は無生物の生物に化成したものである

人の見て以て物を生物なり無生物ありと區別する根據は果して何處

にあるか。要領を得た様で要領を得ぬのは此生物無生物の區別である。何故かと言へば生殖、代謝作用、成長、運動等を營なみ得らるゝものを生物なりとすれば。然らざる石や金や土は生命なき無生物となる。然れども斯る區別は時間より割り出せる區別で。人も五六十年を経れば死ぬ木も二百年を経れば枯れる草は春芽を出して秋になれば枯れる。シテ見ると畢竟時間の問題で空間の問題ではない限りあるものであつて無窮のものではない。果して無窮のものでなく限りあるものであるとすれば。生は天地自然の全般に通ずる道理にあらすして。天地自然の一部分にしか通せぬ道理である。然り而して其生殖、代謝作用、成長、運動等を營なめぬ様になつたものを。死と言ひ枯と言つて石や金や土と同じことになつて仕舞ふ然れども石や金や土は果して成物の素質を備へて居るものか居らざ

るものか。只人の感覺では認識することが出来ないと言ふだけで。之れを確的に定める譯には行かぬ。而して又其生物の死体枯木となつたものが永久に其形体を存するかと言へば決して左様でない時々刻々に色を變へ形を變へ時間の経過と共に末遂ひに空に歸して仕舞ふ。然らば其空に歸しての後は如何。又更らに色となり形となりて現出するものである。シテ見れば生のみが天地自然の全体をなすものでない。死も然り空も亦然りである。故に生と言ふも死と言ふも將た又空と言ふも要するに天地自然の半面の半面をなすものであつて。生死空が相寄りて以て天地自然の全体をなすものである。併しながら此生死空は一定不動のものではない。生は死となり死は空となり空は又生となりて相循環するもので生死空の循環が無窮に連續して。生死空が始めて空間的に不盡不滅の体をなすものである

然らば其生死空の循環が果して何によりて營まるゝかと言へば。則ち氣熱の相生相剋によりて營まるゝものである。而して氣熱の相生相剋が生物を無生物化し無生物を生物化するものである。元來天地自然を生死空に區別するは人の感覺が基礎で。時間的の觀察部分的の理會が之れをして然らしむるので。空間的には生死空の循環が天地自然の一大真理となるのである。果して生死空の循環所謂氣熱の相生相剋が天地自然の一大真理なりとすれば。天地自然の本然の性は變化である若し變化が天地自然の性なりとすれば。生も死も空も共に變化さるゝものなることは言ふまでもない。平らたく言へば人間は生きて居るのではない。其生の根元をなす天地自然が變化するからであつて。其變化を顯現するものは則ち生死空である。

若し夫れ變化を基礎として萬物を見るときは生命なりきものは一とつもない。茶碗かけでも瓦でも乃至襪樓でも雑巾でも盡く生命あるもの下である。何故かと言へば茶碗かけでも瓦でも乃至襪樓でも雑巾でも空に歸せないものがないからである。要するに生死空は時間的に限りあり終始あるものであるが心ずしも空間の際限終始をなすものでない。人も生殖、代謝作用、生長、運動、等を營なみ得らるゝ所謂生の範圍に入る前は空間に存在するもので生殖、代謝作用、生長、運動を營なみ得ない。無生物である其無生物が變化すれば直ちに生殖、代謝作用、成長、運動等を營なみ得らるゝ様になるのであるから。所詮人も無生物の生物に化成したものだと言ふことになる然らば其無生物の生物に化成する道理如何。

○子種は所謂無生物である

天地自然は之れを煎じ詰めて見ると。氣熱の相生相剋が生を作り死を作り空を作るのである。則ち熱五分の一と氣五分の四を混和すれば無色透明の形ちなき俗に言ふ風か出来る。然らば熱五分の二と氣五分の三を混和したならば何が出来るか。又熱五分の二半と氣五分の二半を混和したならば果して何が出来るだらうか、兎に角其分量の加減如何によつて色も出来れば形ちも出来る。軟らかいものも出来れば硬たいものも出来るに相違ない。今仮りに熱五分の二と氣五分の三とが混和して出来上がった一と一つの物体ありとして。其五分の二の熱が五分の三となり氣が五分の二となつたら果してどんなものに変化するか。前者が氷ならば后者は雨となるに相違ない。天地自然は總てコンナ理法によつて生となり死となり空となるのである

人間の子種も其通り三十五度を上ばらず下らざる。所謂氣七分熱三分の混和物たる肉体に其儘置いたでは。更らに變化することのない言はゞ無生物である。委しく言へば男の体内に其儘置くときは。生殖、代謝作用、成長、代謝作用、成長、運動等を營なむ生物とはならない。縦しや男の体内に子種がありとしても其子種にして。生殖、代謝作用、成長、運動を營まざる限りは之れを生る範圍に入るゝことが出来ない。其子種の屬する範圍は死若しくは空である。子種の男の体内にありとするのは最も生に近かく又最も理會し易き場所を言ふのであるが或ひは全たく男の体内にも存せずして空の範圍に屬して居るかも知れぬ。如斯にして空の範圍に屬するとすれば無論のこと仮令男の体内にありとしても前にも説くが如く必ずしも生物なりと言ふことが出来ぬ。要するに子種は氣熱混和の分量一定せる器では遂ひに生物

たり得ることが出来るのである。併しながら若し其肉体の氣熱混和の分量に或る方法を以て變化を來たさしむれば。子種も亦從つて變化するもので男女の交接は其唯一の方法である。則ち摩擦によつて熱の勢力を擴ろめ。茲に肉体の氣熱混和の分量に變化を與たへ以て子種を熱化するのである。詮する所子種を熱化して。女の子宮に納むるまでの熱の量は必ず肉体の常熱以上である。而して熱には物を分解する力がある。則ち物を膨脹もし分裂もするのである。故に交接によつて起る處の三十五度以上の熱は能く男の体内にある子種を膨脹して之れを根外に迸出し以て女の子宮に移植するのである。斯くして女の子宮に於て成長きくもなり頭首手足と分裂もして形体を造くるのである。然かも其成長きくもなり分裂もするのには實に女の體熱である。

依之見之ば無生物たる子種は熱の爲めに變化して。女の子宮に入り茲に始めて成長と稱する生物たる素質が備はつたのである。而して其成長なるものは所謂膨脹分裂であつて則ち熱の力である。兎も角も變化を基礎として子種を見るときは之れを無生物なりと斷じて敢て憚らぬのである。適切なる例を擧ぐれば彼の木の皮に寄生る俗に言ふアリゴである。アリゴは擦り潰せば水になつて仕舞ふ。而して其水になつたものが二時間も経過すると其水の中にビクビクと動くものが出來て。二日も経過すると元のアリゴになる。則ち熱の膨脹分裂は無生物を生物化する証據である。

○病根をなす微菌とは果して何物か

虎列刺、赤痢等の傳染病の病根をなすものは一種の微菌なりとは醫

學上の説である。然らば其細菌なるものは果して何であるか。之れとても子種が人の体内に於て膨脹分裂すると等しく。或る一種の無生物が飲食呼吸等によりて人の体内へ入ると。其這入つた無生物が体熱の爲めに膨脹分裂して肉体の局部を犯かすものではあるまいか。然かも人の体熱は其無生物を膨脹分裂するに最も恰當せる熱度であるからして其無生物が恣しいまゝに膨脹分裂を逞しふするのである。而して其物の膨脹分裂は遂ひに体温に變調を來たして數日若しくは十數日の短時間に肉体を熱化して死と言ふ状態に陥し入るのである。然かも此の細菌の膨脹分裂は取りも直さず熱の勢力を擴ろひるものである。然れども此細菌とても膨脹分裂の極度に到達すれば則ち全く熱化して仕舞へば。其後は直ちに氣化さるゝ様になるから肉體へ這入つても再び膨脹分裂はせない。仮令へば水中に體熱に膨脹

分裂せらるゝ一種の無生物ありとしても。其膨脹分裂に適當なる熱度を通り越して百度百五十度に至れば全く熱化して仕舞ふ。則ち其無生物が三十五度から膨脹分裂を始めて百度百五十度に至れば全く膨脹分裂の極度に到達するかも知れぬ。其極度に到達さへして仕舞へば之れを体内へ入れても更らに膨脹分裂する様なことはない。而して此細菌の膨脹分裂は所謂成長なるもので人間の肉體へ這入つて始めて生物の素質を備へたものである。併しながら人間の如く熱化の極度に到達して母体を離れ更らに生殖代謝作用、運動、成長を營むと等しく人の肉體を離れて全く生物化するものなるか否かは疑問である。如上の見解にして果して誤りなしとすれば。能く物を煮沸し、飲食すれば。先づ以て細菌に犯かさるゝ様なことはあるまい。

○吐瀉の起るは何故か

吐瀉の起るは体内摩擦によりて起れる熱若しくは体内摩擦によらずして起れる熱が不規律に飲食物を膨脹分裂し若しくは肉体の組織に破壊を企て体内に於ける氣化熱化の調和所謂消化が甘まく行はれないからである。要するに氣七熱三の割合が適切に持續されば決して病む様なことのあるものでない。然るに熱が勢力を増して七の氣を六とし五とするときは飲食物の消化處でない血肉までも破壊される様になるから。吐きもし下だしもする様になるのである。而して体内摩擦によつて熱の起る場合は舟や車に乗つたときである。又之れに反して便秘は氣の熱に壓迫を加ふる場合で溢ぶい柿を食つたときの如き夫れである。則ち溢は直ちに氣で物を收縮する力があるからである。要するに吐瀉は熱の仕業便秘は氣が熱の膨脹分裂を妨

ぐるより起るものと見て差支へない。

○疼痛を感じる理由如何

病氣には必ず疼痛の起るものである然らば其疼痛を感じる理由如何。言ふまでもなく体温以上の熱若しくは体温以下の氣が肉体の組織内へ侵入するからである。其状恰かも外氣が皮膚に觸れて皮膚が熱いと感じ寒むいと感ずる様なものである。則ち肉体へ侵入せる体温以上の熱に血が觸るれば疼痛を感ずるし体温以下の氣に觸れても疼痛を感ずるのである。然れども氣と熱の侵害作用は各異なるのである前にも言ふが如く熱は膨脹分裂を以て肉体に侵害を企つるし氣は收縮を以て侵害を企つるのである。委しく言へば氣に熱を收縮せらるれば従がつて貧血する熱に氣を膨脹せらるれば充血する。而

して其貧血と充血が共に痛疹を作るのである。若し其貧血充血が肉体の一部に起こつた場合は其起こつた局部に痛疹が起るのである。則ち頭に起れば頭痛するし腹部に起れば腹痛するのである。然かも充血によつて痛疹の起る場合は一般に體熱が上騰するか。貧血の痛疹を起す場合は餘り體熱に關係はせない。彼のリウマチスの如き縦し醫學上何と言はふとも氣より起る處の痛疹である。何故かと言へばリウマチスは餘り體温に變調を來たさぬからである。要するに痛疹の起る理由は肉体の組織中に起る氣熱の戰爭だと見れば何でもない。

○病氣に對する素人療法

病氣は前にも説くが如く肉體組織の氣熱分量則ち氣七熱三は言は

熱三に對して氣の量七なければ能く熱を和わらげて生を營なむことの出来ないものである。而して此割合から見ても氣より熱の強烈なることが分かるのである。然かも熱は只に強烈なるばかりでない。摩擦は直ちに其熱の銳をして更らに銳ならしむるものである。然るに人は其肉體の内外に於て摩擦は絶へず行はれて居る。則ち手を舉げてても足を舉げてても將又テクテク歩るいても必ず空氣と擦れ合ふ呼吸によつては外氣と肉體との連絡摩擦が行はれる。其他目をシバタ、イても鼻をかんでも物を食つても糞便をして一として摩擦の行はれないものはない。勿論排泄は其一面に於ては熱を放散する方法ではあるけれども体内に於ては尚且つ摩擦が行はるゝのである。肉體の七なる氣が三の熱に犯され易き無理からぬことである。而して其摩擦によつて起る處の熱は盡く血に吸収せらるゝのである。

然らば其強烈な熱を制して氣七熱三の分量を維持して行くには。果して如何にせば可なるか。素人療法の第一は先づ幻想を捨つることである。

○他國人の眞似をしてはならぬ

氣候風土の自然は其の所によつて人に與ふる處の食物を異にするものである。故に日本と米國英國支那等其國々に於ける産物が異かう産物が異なるからして自然食物も異ならざるを得ない。縦し品物が同一でも熱つい處に産したものと寒むい處に産したものでは氣熱の混和量が異かうのである。平らたく言へば上等の醤油が割が利いて伸びるが下等の醤油は割が利かないから伸びないと言つた風に寒むい處に産したものは割が利くが熱つい處に産したものは割が利かない。

い。何故熱つい處に産したものは割が利かないか。割合に熱が多量でブクブクして居るからである然らば寒むい處に産したものは何故に割が利くか氣の爲めに熱が收縮されてシマツて居るからである。則ち寒むい處で出来たものならば煮れば必ず量を増すのである。鯉や鮒も其通り冷めたい處に育つものは割合に大ききはならないが身がシマツて居る煮れば必ず其量を増す暖かい處で育つたものは割合に大ききはなるか煮れば必ず減る。之れと同じ道理で彼の牛馬肉の如きは煮れば必ず縮む。之れ依見之牛馬肉には氣の量少なくして熱の量の多いことが分かる。故に牛馬肉等を多食すれば肉體はブクブク膨れるが誠に割の利かない身体が出来る。則ち肉食を盛んにする處の國の人は肉體がブクブク膨れて体格は肥大するが。所謂ウドの大木精力の割が少しも利かぬ。割が利かぬからしてイザ一番と言

ふどきに臨んで精力はチヨツとも伸びない。日本人は比較的陸撻動物の肉は多食せない。多食せないからして肉体はブクブク膨れない故に支那人や西洋人に較らぶれば体格は誠に小さい。体格が小さいけれども割が利く。割が利くからしてイザ一番と言ふ場合には精力が伸びて、支那や露西亞の大きい人間を敗かして仕舞ふ。彼の海濱に棲む人の辛抱強よいのは氣を主成分として居る水産物を多食するからではあるまいか。就中北海の寒むい方の越後人越中人等の辛抱強きに見ても之れを証據立てらるゝのである。又飲酒せざるもの、根氣強よく飲酒家の事に倦み易く精力の甚だ弱きも其一例である。故に日本人は陸撻動物の肉食や酒を嚴禁して可成病氣に罹らぬ様に割の利く身体をコシラへねばならぬ。故に他國人の眞似を止して肉食や飲酒を廢するは病氣を未發に防せぐ療法である。

○酒は熱なるが故に肉体の内外から血に吸収せらる

酒は直ちに熱なるが故に飲めば直ちに血に吸収される。又肉体の外部分から塗り付けても血は能く之れを吸収するものである。其一例を擧げて見ると先づ腕の軟かい處へ酒を以て字なり画なりを書いて之れを乾かし。木炭若しくは紙の焼いた灰を其書いた部分に擦すり付けてるときは。字なり画なりは殆んど墨で書いた様に鮮明となる。然らば其字若しくは画の浮き出す理由は果して何處にあるか。則ち酒を肉体に塗れば血は直ちに吸収を企つるから酒は肉体の組織内へ滲み込む。而して其滲み込みつゝある酒が更らに氣熱を吸収する力のある炭を擦すり付けるから後戻りして炭に吸収されるのである。兎

に角酒は直ちに熱であつて飲めば必ず肉体の氣熱の分量に變化を來して甚だしく肉体を害するものである。故に酒を飲まざるは病氣を未發に防ぐ方法である。

○河原乞食の眞似は素顔の美を損す

元來人間の肉体は氣七熱三の混和物であつて氣の分量が多いのであるから。元より白かるべき筈のものである。然るに色を食ひ酒を飲み外熱を吸収するから夫れでツブロクなるのである。若し酒も飲まらず陸棲動物の肉食等もせず天日に多く當らなければ白ろいものは飽くまで白くて居る筈である。如何に顔や肌の美を欲しても百姓や其他の勞働者の如く土を對手とし車を對手とし天日を浴び雨風に曝らされたては到底肉体の美などは保てるものでない。顔の如きは特に

然りである何故かと言へば顔は常に外熱を吸収するからである。若し夫れ女の顔や肌の白美にして男の然らざるは何であるかと言へば先づ第一に女は酒を飲まない肉食なども多くはせない外出も餘り多くせないからである若し女も男の様に酒も飲み肉も食ひ然かも毎日車でも曳いて居たならば節クレ立つた黒入道となつて仕舞ふ。又男が酒も飲まず肉食等もせず荒仕事もせずして日蔭にばかり居たならば女の様な優美なものが出来。要するに飲食と運動が人を美化し醜化するものである。故に天日を浴びて激しき労働に従事するものゝ如きは如何に其美を欲しても望んで得らるゝものでないが。多く日蔭にチャラフラして激しき労働に従事せざる婦人連の如きは無理に河原乞食の眞似をして顔に壁塗る必要は毫もない。又強ひてソナ眞似をせなくとも素顔の美は十分保てるのである。然るにコ

テと顔に白壁を塗つて皮膚の分泌を妨げ熱の吸収を阻止し。以て全く幽霊の様に蒼白化して仕舞ふのである。

河原乞食の如きは顔を白くし或ひは繪取つて而して目を釣り上げた釣り下げたり口をモグモグしたりするのは彼等唯一の商賣である斯くして河原乞食の化粧はひとつの資本となるのである。若し彼等にして顔に壁を塗つたが爲めに病氣に罹つて死んだからとて武士の戦場に於ける死と同じく。彼等醜類に取つての或ひは名譽であるかも知れぬ。然るに普通人の顔に壁を塗るは商賣でもなければ資本でもない。其商賣でも資本でもないものに多大の料を拂らつて強いて病氣を求むるが如きは甚だ愚の至りである。

一体彼の白粉なるものは原料の何物なるかは知らないが。其色の白ろい處から見ると。縦し其元は熱を主成分として居つたものにせよ

之れを精製して氣化させたものに相違ない。若し果して然りとすれば肉体の主成分則ち氣と同性質のもので收縮すべき筈のものである故に之れを顔に塗付るときは小皺が寄ると定まつて居る。而して其小皺の寄つた顔を。矢鱈に擦すり散らせばサ、クレ立つのは當然のことである。故にコツテリと壁を塗り立てる娼妓や白首の襟は常にサ、クレ立つてザラザラして居る。今氣の物を收縮する簡單な例を擧げて見ると彼の硝子と卵である。硝子と卵は何れも氣を主成分として出来たもので物を收縮する力を持つて居る。然れども硝子と卵では其力に於て甚だしき差がない。故に硝子の上へ只卵を立つたでは中々立たないが。若し一層收縮力の強よき鹽を卵へ塗り付けて硝子の上に置くときは獨り平らな硝子の上ばかりでない硝子瓶のドテツバラへでも何でも立つ。其立つ所以のものは一に氣の收縮作用に

よつて然るのである。顔へ白粉を塗付して小皺の寄るのは硝子に息を吹きかかれば硝子は直ちに其息を収縮して露とする様なもので尙且つ此理由に外ならぬのである。

而して人の肉体の緊張を保つものは熱の力である肉体に光澤のあるのは一に肉体が緊張して居るからである。故に無理に強いて熱を攝取する必要はないが。天然自然の吸収を沮止する様なことをしては却つて肉体の美を損するのみならず延ひては肉体に大害を及ぼすものである白粉を塗付するは取りも直さず天然自然の熱の吸収を沮止するもので害こそあれ更らに益なきものである。素顔の美を保たんとするには輕ろく手で時々摩擦するが可いのである。摩擦すれば熱が起る而して其起つた熱は直ちに血に吸収される。吸収するからして顔が緊張して光澤が出る。則ち赤ホウくとした櫻色の光澤

ある顔となるのである。然るに白粉を塗つて仕舞へば。顔を摩擦することが出来ない。言はゞ白粉の塗付は顔を幽霊化する處の化粧法で河原乞食などには必要であるかも知れないが否な全く必要であるけれども。素人には断じて必要がない。故に幻想を捨て、河原乞食の真似などをせないのが病氣を未發に防ぐ療法である。

○齒に對しては鹽に優さつた齒磨はない

齒は氣の結晶したものである。故に熱ついてもを制する力を持つて居る。則ち口中へ這入るドンナ熱ついても齒で粉碎することが出来る。其粉碎されるのは熱に勝つべき力があるからである。而して其勝つ理由如何と言へば。齒は氣の結晶したものであるから熱ついてもに對しては。恰かも水を以て火を消すと同じ道理に當るので

あつて歯は言はゞ氷の如きものである。氷の如きものであるからして過度の熱には尙且つ破壊されるのである。彼の菓子屋の歯の欠けるのは煮沸せる砂糖の加減を見るからで所謂過度の熱に敗げたのである。又肉を多食するもの、歯の弱きは尙且つ同じ道理なるを知らねばならぬ。

現在人の使用しつゝある歯磨きは果して歯の衛生に適したものであらうか。余輩の實驗に依るときは必ずしも適當せるものと斷ずることが出来ない何故かと言へば其多くは熱を含んで居るからである。則ち氷に熱其多くを語らずして不適當なることが分かるであらう。縦し適當せる佳品なりとしても鹽に及ばざること萬々なるのみならず鹽よりは非常に高い。鹽は齒と同性質のもので非常に收縮力の強よいものである。而し

て元より堅たい歯を鹽で磨がいて押し固たむれば。堅たい歯が益々堅たくなる譯で鹽ほど齒に適當したものはない。然るに世人は廣告に迷よひ込み否幻想に迷よひ込んで。多大な金を拂らつて却つて齒を損する様な愚を學びつゝある。今後は宜ろしく幻想を捨て、下らぬ齒磨きは之れを排斥し完全無欠の鹽を使用すべきである。

要するに幻想を捨て、我身の如何なるものなるかに考へ及ぶときは自から工夫することが出来るのである。(完)

# 廣告

主身主義者 大塚正男著

## 現代式 判斷の根底

印刷準備中

物質の本性より説き起こして人の行爲に結ぶ  
リウマチス一方藥

## 証 明 丸

一週間分  
金三十五錢

論より証據一劑を試み玉へ（收入印紙代用ハ郵税共壹割増）

東京市麻布區宮下町七番地

證明丸製藥本舗 峰村博進堂

大正二年四月十日印刷  
大正二年四月十三日發行

（定價金貳拾錢）

著述兼  
發行者

大塚正男

印刷人

伊藤樹太郎

印刷所

伊藤印刷所

東京市芝區三田小山町三番地

發行所 正堂

東京市麻布區宮下町八番地

274

16

終

